

リアルとオンラインが融合？  
コロナ時代のTPAMの挑戦

DULL-COLORED POP「福島三部作」 ©bozzo

アイサ・ホクソン「Manila Zoo (ワーク・イン・パンデミック)」  
Photo by Tsai Yao-Cheng (courtesy of the artist, Künstlerhaus Mousonturm and Taipei Arts Festival)

「TPAM 国際舞台芸術ミーティングin横浜」は、横浜を中心とする首都圏の劇場やアートスペースで多彩なジャンルの作品が上演される催し。同時に、世界中のアーティストや舞台関係者らが集まり、ミーティングやネットワーキングを行う交流の場として広く親しまれてきました。2011年に東京から横浜へと拠点を移したTPAMにとって、2021年はちょうど10年目となる節目の年ですが、昨年からの新型コロナウイルスの世界的流行は、今回のTPAMにも大きな影響を与えています。KAAT 神奈川芸術劇場などを会場とするリアルな上演と、オンライン上で作品展開・イベントなどを組み合わせたハイブリッドな構成が今年の大きな特徴になると語るの、ディレクターの丸岡ひろみです。

「コロナの流行が騒がれるようになり始めた時期に開催した昨年2月のTPAM2020では、海外からの招聘作品もゲストもほぼ欠けることなく集まることができました。それからほぼ1年が経って、世界中がすっかり様変わりしたように思っています。しかし振り返ってみると、TPAMは大きな社会的出来事と不思議と共鳴し合っているようなところがあります。例えば横浜での活動をスタートした2011年は、東日本大震災が起こりました。そういった時間の移り変わりを意識しつつ、これまでのTPAMを総括するものに今年はあるだろうと思っています」。

震災後10年を特に強く意識させる作品といえば、谷賢一 (DULL-COLORED POP) による『福島三部作』。1961年、1986年、2011年の福島を舞台に、ある家族と原発の歴史を描いた同作は、2020年度の岸田国土戯曲賞を受賞したことで話題になりました。

「この作品では、アングラ、小劇場演劇など、日本の様々な劇場文化のフォーマットが用いられています。その変遷が、同時に福島、ひいては日本の戦後史の概括になっているという構成がユニーク。英語字幕を付け、海外向けのオンライン配信も行いますが、どんな反応が寄せられるか楽しみです」。

今年のTPAMのハイブリッド性を象徴するものとして注目したいのが、アイサ・ホクソンの『Manila Zoo -ワーク・イン・パンデミック』。アーティストやスタッフは海外からオンラインで参加し、観客は劇場の客席で上演に立ち会うという混合型のプロジェクトになるそう。

「この作品が扱うのは、海外のディズニーランドで働くフィリピン人ダンサーの問題。そしてコロナ禍によって期せずして意識されるようになった人／動物が置かれた、ある種の「監禁」的状態です」。

監禁とは何とも物騒なテーマですが、コロナ禍によって、たしかに人も劇場もかつての自由を奪われた状態が続いています。演者と観客が同じ時空間を共にするのではない変則的な上演形式は、私たちに何を示唆するのでしょうか？

これ以外にも、今年のTPAMでは、シンガポールの現代美術家ホー・ツーニエンによるVRを用いた体験型展示など、コロナ時代に対応した新たな試みが数多くなされるそう。横浜での初開催からちょうど10年となるTPAMに期待です。

丸岡ひろみ (まるおか・ひろみ) 国際舞台芸術交流センター (PARC) 理事長。2005年より「TPAM」(2011年より「国際舞台芸術ミーティング in 横浜」) ディレクター。2003年ポストメインストリーム・パフォーミング・アーツ・フェスティバル (PPAF) を創設。2008年、2011年TPAMにてIETMサテライト・ミーティング開催。2012年、サウンドに焦点を当てたフェスティバル「Sound Live Tokyo」を開催、ディレクターを務める。舞台芸術制作者オープンネットワーク (ON-PAM) 副理事長。

**TPAM-国際舞台芸術ミーティング in 横浜 2021**  
2月6日(土)～14日(日)  
プレイベント期間:1月24日(日)～2月5日(金)

アイサ・ホクソン  
『Manila Zoo (ワーク・イン・パンデミック)』  
2月9日(火)～11日(木・祝) | 中スタジオ |

DULL-COLORED POP  
『福島三部作』  
2月9日(火)～14日(日) | 大スタジオ | 公演情報はp13参照

## 『子午線の祀り』

2月21日(日)～27日(土) | ホール |

公演情報はp14参照

世田谷パブリックシアター『子午線の祀り』(2017) photo by 細野晋司



REQUIEM ON THE GREAT MERIDIAN

「平家物語」を題材にとり、昭和戯曲の金字塔として演劇史に確固たる地位を築く傑作戯曲『子午線の祀り』。日本語の「語り」の美しさと荘厳な響きを引き出す群読という独特な朗読スタイルを随所に用い、歴史上有名な源平合戦に関わる平知盛や源義経をはじめとする登場人物たちの葛藤を「天」の視点から描き出した、木下順二による壮麗な歴史絵巻です。

能、狂言、歌舞伎、現代演劇など多様な出自を持ったスタッフ・出演者が集まった1979年の初演以降、数多くの上演を重ね、2017年、野村萬斎による新演出版が世田谷パブリックシアターにて上演されました。同劇場の芸術監督として長年にわたり、古典と現代が融合した作品を数多く演出してきた野村萬斎。その集大成ともいえる本作は、読売演劇大賞最優秀作品賞をはじめとした数々の演劇賞に輝きました。

そして2021年の初頭にコロナ禍の中で上演するにあたり、2017年版をベースに再構成した舞台を新たにお届けする予定です。戯曲のエッセンスを抽出し、ダイナミックかつテンポ感を増した新たな『子午線の祀り』の誕生にご期待ください。

## KAAT 神奈川芸術劇場プロデュース

## メトロポリス伴奏付上映会 ver.2021

3月20日(土・祝)・21日(日) | 中スタジオ |

公演情報はp14参照

気鋭の音楽家としてその活動に注目が集まる阿部海太郎、生駒祐子、清水恒輔が、ドイツ映画の黄金期であるヴァイマル時代、1927年にフリッツ・ラングにより製作された映画『メトロポリス』のために新たな楽曲を作り、16mmフィルム上映にあわせて生演奏します。

アコーディオン、ピアノ、コントラバスなどに加え、異勇太の自作楽器(装置)によって奏でられる音楽と、サイレント映画の傑作による時を超えたコラボレーションは、2020年4月にKAATで行われる予定でしたが、中止を経て2021年3月に開催されることが決まりました。それを受けて清水恒輔は「4月の公演延期から、早くも8ヶ月が経とうとしています。その間、出演者・関係者一同、劇場スタッフ、また観客となる皆さんも、手探りであらゆる可能性を探しながら過ごしてきた事と思います。私個人も、トライアル & エラーを繰り返しながら、これまでとは違った方法で止まる事なく表現活動を続けて参りましたが、その中には新たな発見が多々あり、内面で思い描いた事と社会との関わりなど、また違った地平に立っている感覚を覚えます。公演に向けて、この貴重な期間に各人がそれぞれに持ち得た新しい視座が、どのように作品に反映されるのか、とても楽しみにしています。」とコメントを寄せています。

映画の舞台は当時から100年先の未来、2020年代のことで。現代を生きる私たちの目にこの映画はどのように映るのでしょうか。

『メトロポリス伴奏付上映会』2015年上映会より photo by Ryo Mitamura

文:久田絢子



Silent Film "METROPOLIS" with Live Musical Accompaniment ver.2021